

ランチョンセミナー 1 <インバネス・メディカル・ジャパン株式会社>
11月28日(日) 12:15~13:15 (第1会場 4階・市民ホール401)

迅速診断検査の有用性と限界 ―尿中抗原検査を中心に―

舘田 一博 (東邦大学医学部 微生物・感染症学講座 准教授)

肺炎は今日においてももっとも重要な感染症の1つであり、迅速な診断および適切な抗菌薬療法がその対応において重要である。最近では、市中肺炎の原因としてレジオネラや肺炎クラミジアといったいわゆる異型病原体の重要性が指摘され、その診断法が複雑化した状況にある。特に肺炎球菌・レジオネラ肺炎は死亡率が高い感染症の代表であり、また選択される抗菌薬が異なることから迅速診断が重要である。これら肺炎の診断法としては培養法が **gold standard** であるが、特にレジオネラにおいては特殊培地を用いた培養が必要であり、その陽性率は決して満足できるものではない。一般的にみて、市中肺炎全体における起炎病原体の決定率はたかだか40-60%というのが現状である。このような状況の中で、レジオネラおよび肺炎球菌感染症患者を対象に、患者尿から病原体抗原を特異的かつ迅速に検出できるキットが開発され利用可能となっている。本発表では「尿中可溶抗原による肺炎の診断」をテーマに、レジオネラおよび肺炎球菌性肺炎の診断キットの特徴・有用性、さらにはその問題点と限界について発表する。

【レジオネラ肺炎】 当教室は厚生省レジオネラ感染症研究班の1施設として本症の診断を開始し、本菌肺炎疑いで送付された検体を対象に約15年間で220症を超えるレジオネラ肺炎を診断している。今回、これら症例を対象にレジオネラ肺炎診断における尿中抗原検出キットの有用性について解析を加える。尿中抗原の検出は Binax および Biotest 社のキットを用い検討した。各種検査法における陽性/検査症例数(%)は、培養法で26%、血清抗体価測定で39%、PCR法で61%、尿中抗原検出で61%であった。特に培養陽性となった *L. pneumophila* 血清型1感染症においては84%が尿中抗原陽性であった。さらに *L. pneumophila* 血清型1以外の感染症における尿中抗原の陽性頻度は26%と低いことから、本キットは基本的に血清型1感染症に対して有用な検査法であると考えられた。

【肺炎球菌性肺炎】 肺炎球菌感染症における尿中抗原検出キットが Binax 社により開発されている。市中肺炎57例における検討では、19症例で肺炎球菌尿中抗原が陽性となっている。このうち血液培養陽性であった2例はいずれも尿中抗原陽性、喀痰培養陽性であった6例中3例が尿中抗原陽性となっている。本発表では、免疫クロマトグラフィー法による尿中抗原検査による肺炎診断の有用性と将来展望に関して報告し、ご参加の先生方とディスカッションできればと考えている。